く，この数のサクラメントによってなされる神の恵みの行為が問題なのである。それ故，サクラメントの数についての論争は教会の本質或は神の恵みの行為についての論争に従属するものとなる。

以上のように本書はサクラメントについての理解を教会との深いかかわり合いに於て同時に教会についての理解をサクラメントとの深いかかわり合いに於てとらえている故に，サクラメントの問題を論争可能な弾力的な場所においている。しかし，あくまでもカトリックの伝統と歴史の中で語っているために，プロテスタントとの論争ということになると多くの問題を伴うであろう。けれどもわれわれをそのような論争又対話に向って導く手がかりを与えているということはたしかである。ただわれわれの場合，サクラメントについて語るには，説教が重要なものとして現われてくるので〝教会とサクラメント〟に〝教会と説教―サクラメント〟という図式が対立することによって論争がはじまるであろう。

（松本芳夫）

Wilhelm Hahn, Worship and Congregation, London, Lutterworth Press, 1963, 75 pp.

著者はハイデルベルク大学の実践神学の教授である。しかし同時に教義学，教理史，新約神学の諸分野に於ても深い素養をもち，そのような広汎な学識が礼拝という一点に集中してこれ秀れた書物を生み出したのである。

内容は「われらに対する神の奉仕」と「礼拝に於てわれらが神になす奉仕」の二部に分れる。

第一部の1に於てはマルチン・ルターの説教から出発して，礼拝はわれらに対する神の行為と神に対するわれらの行為の二側面をもつこと，しかしその場合あくまで神の行為が先行的であり，われらの行為はそれに対する応答に過ぎないことを明らかにする。

2に於ては1で述べられた事実から出発して礼拝に於けるキリストの臨在を説く。著者は初代教会の礼拝に目を注ぎつつ，先ず聖礼典に於けるキリストの臨在を説く。初代教会の聖餐式に於て制定語の中にキリストの遺言が復唱された時陪餐者達は信仰に於て十字架のキリストと同時的にされたと著者は語る。しかし彼は初代教会の信徒達がその聖餐式に於て臨在を体験したキリストは十字架のキリストであったと同時に復活のキリストでもあったという事実，そしてこの両者は彼らの体験の中で絶対に分離し得ない1つの実在であったという事実を明らかにする。

続いて著者は初代教会の礼拝に於けるキリストの臨在は決して聖礼典だけに限定されるものではなくて，み言の宣教を含めた礼拝の全体について同様のことが言えることを指摘する。その際に注目しなければならないのは，初代教会に於ける説教乃至は説教の素材と目されているところの共観福音書の中に膨大な場所を占めているイエスの受難物語及び復活物語である。それらが初代教会の礼拝の中で声高く朗唱された時，信徒達は十字架と復活のイエスが決して過去の存在ではなくて現在彼らの礼拝のただ中に厳然として立ち給うのを生々しく体験したであろうと著者は語る。続いて著者は第四福音書に目を移し同様の

点を強調する。

次に3に於ては，著者はルターの言葉を数多く引用しつつ礼拝の中に臨在し給うキリストが会衆の中に又信徒1人々々の中に成し逸げ給うみ業について語る。そのみ業の第1は人々を教会へと召し集めキリストを信じる信仰へと導くということ，第二はそのようにしてキリストを信じる信仰へと導かれた人々をキリストの体なる教会へと繋ぎその肢とすること，第三はそのようにして教会の肢とされた者達を説教と聖霊典を通して継続的に教育し聖化して行くことだ，と著者は言う。

その間に於て，著者は初代教会でなされた礼拝説教を伝道的説教から厳密に区別するクルマンの見解に反対し，礼拝はそこに於て福音が世に宣言されそこから福音が世へと拡って行く場所であるから，それはつねに世へ向って開かれていなければならないと主張している点は興味深い。

続いて4に於ては，礼拝の中で信者に与えられる輝かしい交わりについて述べられている。著者はそれをキリストと信徒1人々々との間の垂直的交わり並びに信徒相互間の水平的交わりに分ける。そしてその両者が不可分離的であり又相互依存的であることを明らかにする。先ず著者は垂直的交わりを説明して，それは個人がその全き独一性に於てキリストのみ手に受入れられることであり，その時彼に於て完全な自己実現がなされる，会衆の水平的交わりは決してこれを破壊し，個人を平均化・画一化することを意味するものではなくてむしろこのような個人個人のごまかしのない独一性の上にこそ真実の水平的交わりが築かれるのだと説く。けれども他方キリストとの垂直的交わりは，彼が自己を教会の一肢として自覚し他の多くの肢々との水平的交わりの中にあることを深く知る時にのみ起り得ることを強調する。

続いて著者は，会衆の水平的交わりに於ける1つの課題としてカリスマ的賜物を取り上げる。カリスマ的賜物を根本的に規定するものは異常な熱狂的要素ではなくて終末的要素である，そしてそれは常にキリストの愛によって根底から支えられつつ教会の中での具体的な奉仕及び交わりへと向けられて行く，カリスマ的賜物がこのようなそのあるべき真の姿から逸脱しない限りそれは教会の形成のためになくてはならないものである，というのが著者の見解である。

さて以上が第一部の概要であるが，続いて第二部「礼拝に於てわれらが神になす奉仕」に入ると，その1は「応答ならびに協働としてのわれらの礼拝」である。これまでは礼拝が専ら神の行為として捉えられていたのに対し，ここで初めて礼拝がもつもう1つの側面即ち人間の行為としての礼拝に厳しく目が向けられる。そして著者は先ず第一にそれを神の先行的行為に対する人間の応答として規定する。けれどもこの節に於て特に私達が注意すべきことは，著者がそこからもう一歩進んで，次にそれを単に「応答」という概念では表現することが出来ない，むしろ「協働」という概念こそそれに最も適わしいようなものとして考えているということである。即ち礼拝を幾つかの要素に分類して，その中のある要素は神の先行的行為であり他の要素はそれに対する人間の応答的行為であるというのではなくて，礼拝の全体が神の先行的行為でありつつ同時にそれがそのまま人間の応答的行

為であり，つつ同時にそれがそのまま神の先行的行為である，というのである。

次に著者は，応答及び協働としての私達の礼拝はキリストに対する私達の全的服従の中で，又隣人に対する具体的な奉仕との関連に於て打ち立てられる時にはじめて価値ある応答となり得ることを指摘している。

最後に著者は礼拝の内容と形式乃至構造との間の不可分離的な関係について論じ，内容に最も適わしい形式・構造を発見し打ち立てて行くことは教会の避けられない任務であると語る。

次に2に入ると，著者は礼拝を説教・聖礼典・リタージーの三要素に分けて，先ずそれら相互の共通点を相異点とを明らかにする。即ち聖礼典が material を使用するのに対して唯言葉だけを使用するという点に於て，説教とリタージーとは共通点をもっている。しかし他方説教は状況に即した自由な言葉を用いるのに対しその用語が常に固定しているという点に於て，聖礼典とリタージーとは共通したものをもっている。けれども又一方それがキリストによって制定せられ，キリストの命令として教会が永久に継続して行くべき性質のものとして，又キリストの臨在と神の恵みとが会衆に与えられる第一の通路として，更に又それらを執行するのは一方的に教職者であり会衆は唯それを受取るのみであるという点に於て，説教とサクラメントとは明確な共通点をもっておりリ，タージーとは根本的に区別されると著者は説明する。

続いて著者はリタージーの5つの基礎的形式を挙げ，その1つ1つを詳細に説明する。

著者は先に礼拝を説教・聖礼典・リタージーの三要素に分類したのであるが，最後に著者は，それとは別に礼拝を内容的な見地から三分する。第一は ordinarium 即ち教会歴を通して常に変りなく規則正しく進行して行く部分，第二は proprium 即ち時期に従って特別に変化する部分，第三は前の二者を越えて常に自由な部分である。著者は第一の要素を礼拝の永遠性・不変性を指さすものと見，第二の要素を教会がキリストの御生涯の跡を辿りつつ神の国へ向っての歩みを続けつつあることのしるしと見，第三の要素を礼拝と会衆の現実生活との間の直接的な結びつきを示すものと見る。

以上が2の概要であるが，次に最後の3に入ると著者は以上学んで来た事柄の上に立って現実の私達の教会並びにその礼拝の上に光を投げかける。著者は先ず現実の教会の礼拝殊に説教の貧困さを挙げ，それは牧師が説教の準備という自己の主要な使命に生活を集中していないからであると鋭く指摘する。続いて著者は近来教会があまりに組織化され過ぎており，その組織を通して教会又は牧師はあまりに多忙に活動し過ぎていると述べ，それは神御自身の自由な活動を阻む結果となると断ずる。次に著者は教会内に於ける派閥とグループについて述べ，前者は警戒すべきであるが後者は教会の健全な成長のために是非とも必要であると説く。続いて著者は子供達が両親と共に礼拝のリタージーの部分にのみ参加することは，彼ら自身の成長のために好ましいことであると述べる。次に著者は礼拝のために信徒がなし得る種々の奉仕，礼拝の時間，説教の長さ等極めて具体的な問題にまでふれてこの節を終っている。

以上この著書を瞥見して私達が先ず感じることは，著者の極めてオーソドックスな態度

である。著者はルター神学の上に立って，堂々たる論陣を展開している。しかしそれだけに一抹の物足りなさを感じるとも言える。論理の枠組みは堅固であってもその中に盛られている内容に著者の新鮮な独創性を殆んど感じとることが出来ない。殊に第二の部の1節で礼拝のもつ神的側面と人間的側面との関係を論ずるあたりにもう一歩の突込みがほしいように思う。著者は安易に両者の相互依存を説いているが，果してそのようなものであろうか。私は礼拝に於ける神の先行的行為を決して否定するものではないが，しかし他面礼拝は徹頭徹尾人間の主体的行為であると思う。そこに於てはどこまでも人間の主体性が貫徹されるのである。しかもなおそれがそのまま神の行為として用いられるとすれば，そこには先ず両者の真正面からの激突がある筈である。激突しつつ相克しつつしかもそれがキリストを軸として止揚せられるという過程がある筈である。であるのにその点には触れないで相互依存という極めて常識的な言葉で直接的に礼拝に於ける神の行為と人間の行為とを結びつけてしまっている著者の態度に物足りなさを感じるのは私だけであろうか。

更に第二部の2及び3に目を向けるとそこで初めて礼拝に於ける具体的な諸問題が取扱われているわけであるが，著者の力点がもう少し強くこの部分に置かれても良かったのではないだろうか。私達が実践神学の教授である著者からその見解を聞きたいのはむしろこの点についてである。又それ以前の原理的な部分との間の関連が必ずしも明瞭でないのが惜しまれる。

（平山武秀）